

宗学院公開講座（二〇一九年度）

企画展「龍谷の至宝」 〜大谷探検隊コレクションを中心に

龍谷大学国際学部長 三 谷 真 澄

龍谷大学国際学部の三谷と申します。龍谷ミュージアムを通してご依頼があり、このたび宗学院公開講座を担当することになりました。今回の龍谷ミュージアムの企画展は、もうご承知かと思うのですが、本年二〇一九年が龍谷大学創立三八〇周年にあたり、「龍谷の至宝」時空を超えたメッセージ」というテーマで開催されております。七月十三日から九月十一日までとなっております。また、ちょうどこの時期、国際博物館会議（ICOM）が、初めて日本の京都で開催されています。そのため、龍谷ミュージアムの方々が大変お忙しいという事情がありまして、担当させていただいた次第です。

私自身にとりましては、宗学院は、特別の存在です。私も龍谷大学大学院の出身で、先輩や同期、後輩の中には、宗学院を卒業されて、宗学の研鑽をなさっている方が多いのです。私は大変申し訳ないことに、そういう機会を逸しておりました、ここにご出席の先生方に対しては、あるいはそういった宗学の研鑽をされている方々にとりましては、少し言葉足らずとか、ちゃんと分かっているのか、ということがあるかもしれませんが、そこはご海容いた

だければと思っております。

龍谷大学の西域研究

私自身は、現在国際学部におりますが、文学研究科から龍谷大学にお世話になりました。当初は西域研究とか大谷光瑞師の中央アジア探検隊の資料に関わることになろうとは思いませんでした。恩師である上山大峻先生のもとで、さまざまなことを勉強する中で敦煌写本というものがある、これを研究することが大事だろう、というところから入っていききました。そういう中で、いつの間にか今のような状況になっていったというのが現状であります。

今回のテーマと関係の深い「西域文化研究会」は一九五三年に発足いたしました。これは後から申しますが、大谷光瑞師が探検隊を派遣して、そして持ち帰った資料を研究するために、組織されました。当時の会長は龍谷大学の学長でありました森川智徳先生でした。その流れをくんでいるのが世界仏教文化研究センター「西域総合研究班」ということになります。六六年前の一九五三年の発足後、仏教文化研究所の特別指定研究など、紆余曲折があつて、二〇一五年四月に発足した「世界仏教文化研究センター」の中の基礎研究部門の一つになりました。私はその研究班の代表でもございます。

それから、時限的な研究であります。、「アジア仏教文化研究センター」は二〇一九年度で第二期が終了します。いくつかの研究ユニットがあり、そ



の中で大谷光瑞師の動向に特化した研究をおこなっております。これまでとかく大谷探検隊に関わる部分ばかりがスポットライトを浴びていたのですが、それ以外の部分、例えば教育者であるとか事業家であるとか、あるいは建築の設計者とか著述家とか、さまざまな側面にスポットを当てるという研究を継続して参りまして、今年度が最終年度となっております。

昨年二〇一八年は、実は大谷光瑞師が亡くなられて七十年という年でありました。大谷光瑞師（鏡如上人）遷化七十年記念事業として、国際シンポジウムを東覺で開催いたしました。その企画者として実行委員を務めさせていただきました。

それから、「古典籍・文化財デジタルアーカイブ研究センター」であります。実は今回、後で見学していただくとおと思いますが、大谷探検隊が持ち帰った資料の複製とか古写本の画像を撮影したり、インターネット上で公開しているのがこのセンターです。これは二〇〇一年に「古典籍デジタルアーカイブ研究センター」として発足いたしました。私は兼任研究員としてコンテンツ研究を担当してきました。理工学部の先生と文学部の先生を中心として、文理融合型の研究が続けられました。一つの成果としては龍谷ミュージアム二階にございますベゼクリク千仏洞の石窟壁画復元などに携わってきたところです。現在、縁あってセンター長を務めさせていただいており、二〇一九年度に新たな組織として生まれ変わりました。

また、龍谷ミュージアムについては、二〇一一年に開設されました。そこに研究プロジェクトが設置されているのですが、私はその研究員の一人でもあります。ですからミュージアムから何か言われますと断ることはできません。そういうことで、今回は分にはないと思いましたが、講演をさせていただいたということになります。

一方、浄土真宗本願寺派との関係ですが、私は現在、広島山の山寺の住職でもあります。先々代の住職は大谷光瑞

師が神戸六甲に作られました「武庫仏教中学」の最後の学生です。それから、父方の祖父も武庫仏教中学に入学しておりまして、「瑞門会」という親睦団体の名簿にも出ています。これも実は龍谷大学に入ってから気がついたようなことで、若いときにはまったく知りませんでした。龍谷大学に入っているいろいろなことを研究させていただく中で、知らず知らずのうちに自分はそういう環境で育ってきたのだな、ということをやばせていただきました。ですから、私たちは、大谷光瑞師の残された研究資料をきちんと研究し、報告し、そして皆さんに提供する、いわばそれが責務であると考えて、ここにおります。

今回は、龍谷大学三八〇周年の記念事業としておこなわれております。従いまして、通常のテーマを決めた展示会ではないため、全体にわたる紹介は、非常に難しいです。まさに学長にしかできないのではないかと思っております。

どのような形で今回の七十数点の展示品が選ばれたかと申しますと、それぞれ仏教学や真宗学や仏教史や東洋史、あるいは私でしたら西域文化研究会ですが、その中で龍谷大学が持っているお宝中のお宝を厳選して、それを展示しましょう、ということなのです。お持ちの方がいらっしゃるかもしれません、これは、『時空を超えたメッセージ〜龍谷の至宝』という名の記念書籍(*)です。普通龍谷ミュージアムでおこなわれる特別展の図録というのはこのような形ではありません。まさに「図録」という感じですが、今回は入澤学長たつての希望で、普通の本屋で買えるような、一般読者に手にとって読んでもらえるようなものにしたたいと。最初に書いてありますように、特に若い方に読んでもらえるような、そういう目的で作られたものです。ですから、単なる展示会のための図録ではなく、単独の出版物になっているということです。そういう点で、三八〇周年記念事業の一環ということで書籍を出し、そして展示会をおこなっているということです。

龍谷大学が持っているお宝中のお宝を厳選して、そして一堂に会して展示をするということになりますので、先ほど申しましたように、いろいろな資料があり、内容も非常に多様です。ですから、私が今日ここですべてについて詳しく説明する能力もありませんし、時間もございませんし、それはとても私ができることではございません。ですから、今回は西域関係のものであれば、つまり、大谷探検隊のコレクションに関わる内容であれば、多少はお話ができますということ引き受けさせていただいたということです。

さて、龍谷大学はもともと西本願寺阿弥陀堂の北に「学寮」という形で一六三九年に創設され、転々として、そして私たちがおりますこの大宮学舎の前身となる「大教校」がちょうど百四十年前の一八七九年に竣工いたしました。その後、深草学舎や瀬田学舎が開設され、現在に至っているわけであります。礼拝施設として本館がありまして、その本館の北側と南側に寮があつて、そして後にこの東側に普通教校というものが出来上がっていったというところで現在に至っております。これについても、今回の展示に一部出ております。このあたりのことについては「古典籍・文化財デジタルアーカイブ研究センター」も関わっております。

大谷光瑞師は、一九一一年に、第二十二代宗主として親鸞聖人六五〇回大遠忌法要を勤修しておられます。今年ちょうど「梅小路京都西駅」という長い名前の駅が新設されました。この駅が今年できたというのは一つの縁かなと思っております。当時、非常に多くの方が参拝に来られるものですから、梅小路停車場に臨時の駅を造られたのです。そのとき、龍谷大学の学生さんがさまざまな形で布教活動、伝道活動をおこなったそうであります。

今回の企画展は、「龍谷の至宝」と呼称していますが、実は龍谷大学と本願寺の関係というのは大変深いものがあります。一九六一年、親鸞聖人の七〇〇回大遠忌がありました際に、深草学舎に経済学部が開設されています。そして、龍谷ミュージアムが開設されたのが二〇一一年です。本願寺では二〇一一年から二〇一二年一月十六日ま

で七五〇回大遠忌がおこなわれましたが、まさにこの年に龍谷ミュージアムが開設されております。ですから、この五十年単位の龍谷大学の変遷、あるいは新たな展開を考えてみますと、当然のことですけれども、本願寺との関係が非常に大きなものがあるということであります。

一六三九年に開設され「学林」という名称になっていきます。六条通りから南を望むところに学林町というところがあります。海外から来られたお客様をご案内することがありますが、「龍谷大学の変遷について、昔は学寮とか学林と言っていました」と説明するときに、ちょうどこの通りを通らせていただきます。「お寺がたくさんありまして、そしてここを学林町というのですよ」と。「このあたりに龍谷大学はあったのです」ということをお話しいたします。

学林があつた場所には現在、本願寺の国際センターがあります。一四〇年前の一八七九年には「大教校」が落成しておりまして、この本館に北齋・南齋を備えたところで大きな催しがおこなわれています。

ちなみに、一四〇年前、京都市に下京区と上京区が誕生しました。大教校竣工と同じちょうど一四〇年前に下京区ができたということがあります。現在の大宮学舎本館は、NHKの大河ドラマの「いだてん」東京オリムピック「の東京高等師範学校のロケ地になった場所であります。

深草学舎の礼拝施設である顕真館は、一九八四年に新築されました。瀬田学舎が開設されたのは一九八九年で、今年で三十年になります。ここに理工学部がございまして、「古典籍・文化財デジタルアーカイブ研究センター」は、今回ミュージアムでの展示にあたってさまざまな画像を提供しております。講演に際立ち、最初にパワーポイントの映像を流しておりましたので、ご覧になったかもしれません。実はこの映像も「古典籍（文化財）デジタルアーカイブ研究センター」で編集をして、今年二月に「西域桃源く大谷探検隊から見たクチャの仏教文化」と

いう国際シンポジウムで公開しました。台湾の研究者と韓国のソウル国立中央博物館の学芸員の方に来ていただきまして、この清和館三階で発表していただきました。瀬田学舎に瑞光館という建物があります。光瑞師のお名前をひっくり返したような名称ですが、そこでさまざまな活動をおこなっております。その成果の一部が今回ミュージアムでも公開されています。

樹心館については、ミュージアムにも出ております。一九九八年に瀬田学舎に、礼拝施設として樹心館ができたのですが、もともとは大阪府警の警察署の建物だったのです。これが解体されまして、一九〇八年、大谷探検隊の第二次隊派遣の年と同じ年に図書館として建てられたものです。それまで龍大には一つの独立した建物の図書館がなかったようですが、これで初めて図書館ができたわけです。これが後に瀬田学舎の礼拝施設として移築されたということがあります。二〇一五年に登録有形文化財(建造物)に登録され、現在は一つの文化財にもなっています。私は宗教部長代理をしたことがあります、そのときにはここで降誕会や報恩講といった法要行事をおこなったり、毎朝のお勤めもしておりました。このことについても、ミュージアムの中でパネル展示されています。

そして、龍谷ミュージアムは二〇一一年にできました。先ほど申しましたように、親鸞聖人七五〇回忌の時期に合わせてオープンしました。

龍谷の至宝と本願寺

このように、「龍谷の至宝」というものを考える際に、これまでの本願寺との関係とか経緯が非常に重要なものになっていることは言うまでもありません。

今回の展示会の章立てですけれども、基本的には記念書籍と同様になっています。ただ、この中に出ているもの

と、実際に展示されているものとが違うものがありますし、すべてが展示されているわけではないということもご承知いただければと思います。

「仏教東漸」から「人間・科学・宗教」となっていますが、私が今回担当したのは「大谷探検隊の精華」と名付けられたところであります。内容を見ていただきたいと思えます。今回、第5章「大谷探検隊の精華」として出されているのは計十五点です。出品リストによりますと、ナンバー51から64となっております。実は、実際に展示されているものは計十五点です。これを合わせますと十六点になります。それから、展示は、前期と後期に分かれていますので、全点が全期間を通じて展示されているわけではありません。「李柏尺牘稿」から始まりまして、12番目まであります。ここの錦断片というのは特別出陳という形になっています。書籍には入っていないものです。錦は、あまり長期間にわたった出陳ができないということもあって、こちらの時期に合わせて展示されていることになりました。

それから、「ラサ烏瞰図」。これは、今しか見られないものです。前期・後期に分かれています。後期にしか出ておりません。大谷探検隊といえますと、とかく西域、シルクロード、中央アジアとすぐに連想されるのですが、広い意味では中央アジアの中ではありませんが、チベット関係のものであります。これはまた後でご説明いたします。

今回の話は第5章が中心ですが、お気をつけいただきたいのですけれども、第5章のみが大谷探検隊関係かといえますと、実はそうではありません。これは例えば「ネパール梵本無量寿経榑本」と書いてありますが、これは有名なものですけれども、榑亮三郎博士が紹介された資料で、一般に「榑本」と言われます。サンスクリットのへ無量寿経の代表的な写本です。これについては書籍のほうには出ておりません。会期前期には展示されておりました

が、現在はされておりません。現在は書籍にはありませんけれども、「光寿会」という大谷光瑞師がサンسكريットやチベット語の研究のために作られた研究会に関わりのある『大乘莊嚴経論』という資料が現在出ているということです。

それから、もう一つ申しますと、三八〇周年記念事業の部分は三階の展示室にあります。二階は実は「シリーズ展」といって、これまでも何度も展示されているかと思いますが、「仏教の来た道」ということで、インド・中国・日本と仏教の来た道（ブツダロード）を展示しています。主として龍谷大学の一年生は「仏教の思想」という科目が必修になっておりますので、この必修科目の中で前期一回、後期一回、必ず行かないといけません。そのときに、回るのが、二階展示室にあります部分です。

それで、現在、二階展示室の中にも大谷探検隊関連の資料があります。大体このあたりがコレクションの本身になつてくるかと思えます。今回の「龍谷の至宝」の中の大谷コレクションというテーマからしますと、多くは第5章になります。それ以外にもあるということだけご承知いただければと思います。

もう一つ、パネル展示とかデジタルアーカイブに関係するものも記念書籍の中にあります。例えば「天山植物標本」というものがあります。これは展示されておりますが、書籍の中で説明が若干されております。

それでは、いよいよ大谷光瑞師、鏡如上人の探検事業につきましてお話を進めていきたいと思えます。西域文化研究会の研究成果として、一九五八年〜一九六三年にかけて『西域文化研究』（六巻七冊）が発刊されました。昨年が第一巻の刊行から六十年になるということで龍谷講座という公開講座も企画しました。

最初に当時の学長であります森川智徳先生のメッセージを見たいと思えます。

敦煌及び中央アジア一帯より豊富な文献や資料が発見され、学界に紹介されてより既に五十年余りを経過し

た。その間、ヨーロッパ各国及び中国の探検隊に伍して、大谷光瑞上人がインド、チベット、中央アジア、中国等の各地へ派遣された所謂大谷探検隊が我が国にもたらした資料は質、量ともにすぐれたものであつた。

これは非常に重要なことが書いてあります。普通大谷探検隊といいますが、中央アジアとすぐに言われたりシルクロードと言われたりするのは。先日、NHKBSプレミアムの取材を受けたときも、やはり大谷光瑞とか大谷探検隊というと、シルクロード中心です。チベットとかインドへの関心はあまり知られていない感じでした。やはりここに書いてありますように、インド、チベット、中国ということもしつかりとこの時点で書かれています。

ここに「く等の各地へ派遣された所謂大谷探検隊」とあります。それで、質、量ともに優れたものではあつたのですけれども、

しかし、爾後の研究が十分行われなまま不幸にも今次の大戦に際会して、その大部分は散逸した。戦後、その残存資料の一部が龍谷大学に移管せられ、ようやくそれらについての組織的な研究が始められたのである。石濱純太郎博士を研究代表者とする西域文化研究会が、昭和二十八年以来五ヶ年にわたつて継続して来た研究の成果の一部を、ここに刊行しうるに到つた事は、関係者一同の喜びであると共に、中央アジアの古代文化の研究に聊かなりとも貢献しうるものであることを、私は確信している。

とあります。

当時の西域文化研究会のメンバーはあまりにも多いのでここには載せませんけれども、そうそうたるメンバーです。当時の一級の学者、仏教学とか東洋史学とか言語学とか、さまざまな方々が結集をしてこの研究会を立ち上げたのです。まさに今、私も科研費とかいろいろな外部資金を獲得することを求められていますけれども、学際研究とか国際的な研究とか、研究の社会貢献であるとか、文理融合とかいろいろなことが言われます。ところが、この

研究会はまさにその嚆矢です。そのような多分野にわたる人々が結集しなければ、とても検証ができないような多岐にわたる資料がここにはありました。

ホームページなどには、大谷コレクションは九〇〇〇点と書かれてあります。総数はなかなか提示できないのですが、最近私は、九〇〇〇点以上と言っています。それだけの数の資料が龍谷大学に移管されて、その研究のために西域文化研究会というものができたということです。

「本書の刊行に当り、独力大事業を遂行せられた大谷光瑞上人の偉績」と、ここに大谷光瑞師の功績であるということがうたつてあります。そして、本研究会発足のときは羽田亨先生のご尽力も大きかったという謝意が示されています。

その後大谷探検隊資料の移管の経緯が書かれています。「又、西域文化研究会が発足したのは、大谷探検隊資料を移管せられた大谷光照門主並に本派本願寺当局の好意に負うところ絶大であり」、五ヶ年にわたつてその当時の文部省から研究費をもらったということが書いてあります。こうして当時の森川智徳学長が大谷光瑞師の偉業、功績ということと、その資料を大谷光照門主（当時）が寄託されたということが示されています。

最近の研究成果

以上が基本ではありませんが、この間、私が経験した中で大変大きなトピックを紹介したいと思います。先ず、ドイツ、ロシア、日本に分蔵される断片が一つに接合した写真（図1）です。これを最近「群際接続」と呼んでいます。なかなかこういう写真を見ることはないと思うのです。左がドイツに現在ある断片です。私はベルリンで実物を見ました。中央がロシアに現在ある断片です。そして、右下の小さい断片が日本の龍谷大学にあるもので、大谷

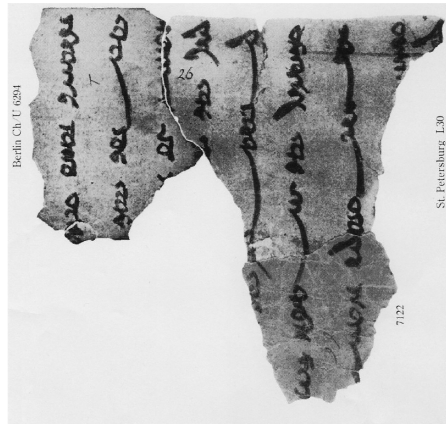


図1 ドイツ・ロシア・日本の群際接続

コレクションの一部です。これは一九九七年に亡くなられました百済康義先生とドイツのトルファン研究所の所長でありましたズンダーマン氏と、京都大学の吉田豊先生がこれを紹介されました。裏側は、仏教の漢文経典です。裏側をこうして接合させて、表を読むことができます。小さな断片単位ではよく分からないのですが、中央のサンクトペテルブルクの資料として現在は漢字の部分も分かっています。これを最初に見たときに本当に驚きました。ドイツにあるものとロシアにあるものと日本にあるものがくっついた。こんなことがあるのかと私は思いました。

同じようなところに探検に行っている。そして、同じようなものを見つけて帰った。だけど、なかなか見つからないのです。ところが、表だけではなかなか分からないのですが、裏に文字が書いてある。再利用といえますか、反故紙の利用といましようか、この反故紙の再利用についてはまた後でも出てきます。このようなことがあって、特に『イラン語断片集成』とありますように、この文字資料、特に非漢字資料を研究されている方が、まずこういうことを見つけられたのです。非常に私も驚きました。私が今こうして曲がりなりにもいろいろな写本研究している一つのきっかけを与えてくれたものであります。

一方、二〇〇二年、旅順博物館との共同研究がスタートいたしました。ちょうど大谷探検隊第一次隊派遣一〇〇周年の年に共同研究が始まりました。もちろん旅順博物館には大谷探検隊の持ち帰った資料が多数所蔵されていることは分かっていたのですが、軍港で外国人立入禁止区域にあるため、なかなか研究ができませんでした。ところ



図2 龍大・旅順の群際接続

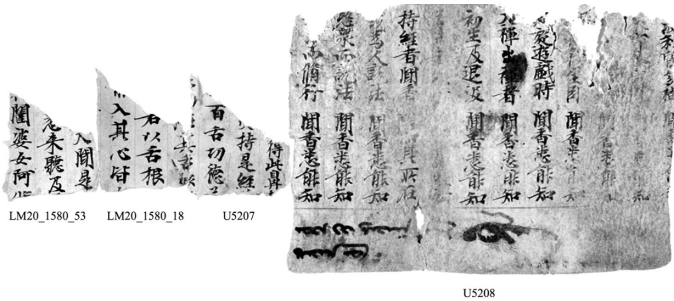
が、上山大峻先生の強い希望もあって、それができるようになりました。そして二〇〇五年に出版物を出しました。そのときに、一つの象徴的なものとしてトップに持ってきたのがこの写本(図2)です。上にある部分が大谷探検隊の持ち帰った資料で、現在、龍谷大学にあります。

そして、下部の大きな写本が旅順博物館にある資料です。画像処理ソフトを使いまして色を変えてサイズを変えて、そして接合させました。この資料につきましては、旅順博物館でもこの接合写真が展示されております。共同研究の成功を象徴するものです。

さて、続いてこれはどうか。左の二断片は大谷探検隊収集です。龍谷大学にあるものではありませんけれども、旅順博物館にある二点の写本と、現在ドイツのベルリンにあります右側の大きめの写本を含む二点とが接合しています(図3)。これは二〇〇五年以降に旅順博物館との間で共同研究をおこない、その過程で発見されたものであります。初めてそれを確認することができました。大谷隊とドイツ隊は、同じ時期に同じトルファン地域に探検をおこなったわけですから、その収集資料同士が接合する可能性とし

ては当然あります。

ところが、旅順博物館の資料はざっと二万六〇〇〇点あります。その中で、接合が分かったということが、最近の成果ということになると思います。



Depositar der BERLIN-BRANDENBURGISCHEN AKADEMIE DER WISSENSCHAFTEN in der STAATSBIBLIOTHEK ZU BERLIN - Preussischer Kulturbesitz Orientabteilung

図3 ベルリン・旅順の群際接続

最近さらに驚くことがありました。大谷隊が持ち帰った資料で旅順博物館にあるものと、フィンランドの国立図書館にある資料が接合したのです。これは恐らく世界初だと思えますけれども、東海大学の片山先生が発見され、新聞でも報道されました。フィンランド隊はトルファンには行っておらず、実際に探検しているわけでもありません。では、なぜこれらが接合したのでしょうか。一つは、現地に行つて発掘作業の結果持つて帰つたというのではなく、現地に探検隊が行つたときにだれかが売りに来て、それをまとめて買って帰つた、それがたまたま一つはドイツに行き、一つはヘルシンキに行き、日本に戻つてきたことになるのです。

ですから、これまで大谷探検隊が持ち帰った資料は、事実、発掘作業をして持ち帰つたのか、あるいはそこでたまたま見つけたのか、あるいは誰かが持つてきたものを購入したのか、さまざまなことがありましたが、このあたりを見ますと明確に購入したものであるということがある程度理解できると思います。大谷隊の持ち帰った資料は、どこで発掘されたのか。どこで出土したのがよく分からないということは、大谷探検隊の資料の一つが現地の人がこれはどこで得たものだという説明をそのまま受け取っている可能性があるのではないかとことです。

それから、第5章の8番目に「青龍（給田文書）」とあります。これは、現在展示されておりますし、記念書籍

の中にも出ています。龍谷大学のものはすぐばらばらです。見ていただきますと分かりますように、大谷文書何番、何番とずらっと出ています。これは、東洋史の小田義久先生がずっと西域文書の研究をして、『大谷文書集成』として出版されています。

一生懸命こういった文字を読まれました。ばらばらですから、何が書かれてあるか、つまり文字資料として研究されてきました。何と旅順博物館へ行きますと、かなり整った形、鮮明な色でこの部分が残っています。この一番上の部分が青龍で、そして何層にもわたって紙が重ね合わされ、そのどこの層が今私たちが見ている龍谷大学のものだということが判明したのです。これは、私も二〇〇二年のときに大谷探検隊一〇〇周年記念事業がございまして、小田先生が本願寺の聞法会館で発表されました。文献資料として文字ばかり見ていたのですが、実は文字ではなくて形のほうに意味があったということが、この旅順博物館の大谷探検隊の持ち帰った資料の一致しているところから分かりました。これも文書としての接合ではありませんけれども、縦に層をなしている部分の一番上が旅順にあったということです。このように、別々の所蔵機関にある諸断片が相互に接合することを「群際接続」と言っております。

昨年、二〇一八年十二月に東京の法政大学と京都大学でシンポジウムがおこなわれました。ドイツ、中国、日本の研究者が集結して、ヘルシンキの方も来られました。そこで、このような現象をどういう言葉で表現するかということを検討したのです。当初、その研究リーダーであった小口雅史先生や片山章雄先生は「群外接続」ということをおっしゃっていたのです。群の外、つまり大谷探検隊が持ち帰った資料とドイツ隊の持ち帰った資料はどのようなのか。同じトルファン地域から持ち帰った資料であるとすれば、同じグループに入るかもしれないけれども、別々の所蔵機関が所蔵していることからすると、別のグループということになる。となると、例えば大谷隊が持ち

帰った資料とヘルシンキの中にあるものは群外というふうになるということから群外接続という言葉が作られたのですが、最終的な言葉としては群際接続がいいのではないかとになりました。そのときには、後に急逝されました辛島静志先生も東京にいらっしやいまして、やはり群際という言葉がいいのではないかとすることを盛んにおっしゃっていました。

世界中にたくさんさんの写本があります。それがびったり合う可能性がある。グループ、グループでまったく分かれているのだけでも、同じところから発掘をされ、同じところから出土し、もともと同じところのものだったということがあるとすると、グループとしては一つなのかもしれませんが、所蔵機関が別であるといったとき、あるいは同じ探検隊が持ち帰った資料であっても別のところに所蔵されているものがあるということを経験的に考えたときに、群外とはなかなか言いにくいので、「際」という言葉、例えば国際とか学際といった言葉がありますが、こういう言葉がいいのではないかとりました。

当時、フィンランドの方もいらっしやいましたし、中国の方もいらっしやったのですが、いろいろ議論しました。一つの言葉を作ったわけです。私は鳩摩羅什の訳経場を思い出しました。一生懸命みんなで議論して、ああでもない、こうでもないと言いながら、一つの術語を作り、一つの訳語を作るわけです。それは中国語でも通用するし、日本語でも通用するし、英語でも通用するし、フィンランド語でも通用するような新しい言葉を作ろうということで、非常に興味深い経験でした。その結果、「群際接続」という言葉が誕生しました。

まさに私たちがやっている細々とした作業は、このような取組をだんだん増やしていつて、より大きなところに持つていこうということです。よく私はジグソーパズルにたとえます。ジグソーパズルというのは一〇〇〇とか二〇〇〇とかバラバラになったピースを、予め分かっている完成形通りに組み上げていくものです。ところが、私た

ちの作業は完成形のないジグソーパズルを組んでいるようなものです。最終形が分かっているわけではないですけども、とにかく世界中に散らばっている写本断片群を組み合わせて、最終的にはどこまで行くか分かりませんが、なるべく正確に原型を復元しようという作業を地道におこなってきたということでもあります。

その意味でも、この大谷探検隊の持ち帰った資料は、文献資料という点でも一級の資料ですし、それ以外のものも含めまして大変重要な意味を持っているということを示すために、部分的にですが紹介させていただきました。

西域・中央アジア・シルクロード

本講義では、「西域」という言葉をたびたび使っています。西域という言葉もなかなか難しい言葉です。これも皆さんはご承知かもしれませんが、龍谷大学仏教学科で、仏教学叢書という書籍を出版しております。唯識・西域・俱舍・華嚴・天台という五つのタームを中心に行っております。私は第二巻の「西域」のいくつかの章を担当させていただきましたが、そのときに西域についての定義を出しております。

これは森安孝夫先生の定義です。最初は漢帝国の支配が及んだ天山山脈以南のタリム盆地地方、すなわち天山南路だけを指したが、後にはさらにパミールの西方までも含むようになった。ペルシャも含まれることがあると、非常に広い範囲を指すことがあるということをおっしゃっています。本来は、写本が大量に発見されたことで有名な莫高窟のある敦煌の西方にあります玉門関、陽関以西の地域のことを指していたわけですが、だんだんそれが広がっていつて、非常に広い範囲を含むようになったというわけです。ですから、私たちは西域文化研究会と言っていますけれども、その西域がだんだん拡大しているということで、多くの写本類を扱うことになったのはそういうところもあります。

次に「中央アジア」という言葉ですけれども、今年二月の国際シンポジウムでもどう表現するか議論しました。あるいは二〇二〇年に韓国で国際仏教学会がございますが、そのパネル発表申請時にも「西域」をどう表現するかについて大変苦労いたしました。Central Asia^①はなか、あるはInner Asia^②がいいのではないか。いろいろな言葉を考えました。よく言われるCentral Asia、中央アジアというのは非常に定義が難しいのです。皆さんはそれぞれのイメージが頭に浮かばれるかもしれませんが、よく中央アジアという言葉は聞くのですけれども、狭い意味と広い意味がありまして、現代、新聞記者の方がいらっしゃったらお分りかもしれませんが、新聞などで中央アジアと言っている場合は、カザフスタン・ウズベキスタン・キルギス（クルグズ）・タジキスタン・トルクメニスタンの旧ソ連の五か国を指すと言われます。

ところが、私たちがよく文献資料などで表現しているのは、これに加えて新疆ウイグル自治区も入ります。大谷探検隊が写本資料を中央アジアから持ち帰ったと言う場合は、このあたりが中心になります。

それから、アフガニスタン、パキスタンを含むこともできませんし、それからより広い定義で言いますと、チベットも含むこととなります。となると、今回、大谷探検隊が行ったところはシルクロードと言ったり中央アジアと言ったりしていますけれども、チベットというのは別に分けることはないということにはなりません。このように広い範囲のことを指す場合があります。ですから、もし皆さんが何かの記録とか論文を見られたときに、中央アジアと書いてあるときに、その著者がどの範囲のことを言っているかというのは大変重要な意味があるのではないかと思います。

次に「シルクロード」と言われる言葉の範囲です。シルクロードという言葉そのものについては説明の必要はないと思います。もともとドイツ語のSeidenstraßeという言葉を、英語でSilk roadと訳しました。日本語も、そ

れを受けてカタカナで「シルクロード」とし、中国語も「絲綢之路」としています。シルクロードというとシルクのロードですけれども、大谷探検隊が中央アジアに行きましたとか、シルクロードの文物を収集しましたとか、西域資料を持って帰りましたと言うのですけれども、シルクロードというのは東西南北交易ネットワークの代名詞というふうには森安先生は定義されています。非常にたくさんさんの品物が行き来しています。

シルクといいますと、中国原産の絹をどのように西のほうに持つていくかという話になります。一方で、中国のほうから見ますと、インドからの文物やペルシャからのものとか、あるいは玉とかそのような中央アジアから運ばれてくる文物が非常に重要視されました。ですから、見方によって「シルクロード」と言われますし、「香辛料の道」とも言われるでしょうし、「玉の道」と言ってもいいでしょうし、さまざま言われ方が可能だと思います。

龍谷大学はたびたび「ブッダロード」という言葉を使用してきました。仏（ぶつ）の来た道というタイトルで展示会をおこなってきたりしてきたのもそういうことです。

この西域、シルクロードは、一方的な見方からすると、中国の産品であるシルクをどんどん西へ西へと送っていく道であります。これだと一方通行になってしまいます。「ブッダロード」といった場合は、遠くインドから、いわゆる中央アジアを経て、中国、朝鮮半島、そして日本にまで伝わってきたその流れを指すとすると、これはシルクロードではなくブッダロードにはかなりません。仏の来た道、仏教の来た道と表現することができるといえます。

その中で、この大谷探検隊は中央アジアを目指し、そしてそこで見つけてきたさまざまな資料が、今回展示されているということになります。

西域の資料全体から見ますと、文献資料と美術考古資料に分けられます。非常にたくさん種類があります。内

容につきましてもそうですし、宗教につきましてもそうですし、特に今回の展示の中でブラーフミー文字のものとか、チベット文字のものとか、カローシユティー文字のものなどが展示されています。そのような漢字以外の文字や言語で書かれたものがたくさんあります。先ほど約九〇〇〇点、あるいは私の言葉では九〇〇〇点以上と申しましたが、その中には多岐にわたる文字と言語の資料がございます。これがひとつの特徴です。その中の幾つかの文字資料について、今回は展示されております。

3番目のところにカローシユティー文字というのがあります。それから4番目にはクチャ語というのがあります。それからコータン語とか、ウイグル語とか、西夏語とか、そのようなものがあります。このようなさまざまな言語で、あるいは文字で書かれた資料があるということになります。

幸いなことに、このたくさんのお話や文字の資料が龍谷大学にあるということで、世界各国の研究者が龍谷大学の図書館に来られるのです。時々私も同席したりします。例えば先ほど台湾の研究者について申しましたけれども、慶昭蓉さんは、トカラ語Bの文献を研究されている方で、世界中の文献資料、参考資料を網羅的に見ようとする場合、龍谷大学を外すことはできないわけです。ですから、例えば半年間来られるとか、一年にわたって、例えば京都には来られないけれども別のところへ来られて、わざわざ世界各国から訪れられるのは、ほかにはない資料が龍谷大学にはあるからです。

これらのものがたまたまあるのではなくて、むしろ大谷光瑞師が自分の手元にあるべきものを厳選された結果ではないかと私は推測しています。ですから、漢字のものばかりでもいい、サンスクリットのものばかりでもいい、でも、そうではないのです。さまざまな言語、文字のものが本当に網羅的に入っていたということですから、これが今は世界中の研究者を集めて、龍谷大学に来てもらっているわけです。

ですから、私たち龍大にいる者からしますと、なかなかそう思わないのですが、外部の研究者からしますと龍谷大学はすごいと、他にはない資料が龍谷大学にはある。これは唯一無二の資料ですから、写本資料というか、そのような資料を龍谷大学は持っているということは、このような展示会を通じて多くの方が知っていらっしゃると思います。美術考古資料についても今回は特に織物について出ておりますのでご覧いただければと思います。

先にお話ししましたが、『西域文化研究』が学際的研究の嚆矢として始まったということでした。

探検の時代ということですが、たくさんの国が十九世紀の終わりから二十世紀の初めにかけて訪れています。有名なところでは、ロシア、スウェーデン、フィンランド、イギリス、フランス、ドイツということですが、特にこの中で大谷探検隊と関わりが深いものとしては、イギリスのスタイン探検隊、それからフランスのペリオ探検隊、ドイツのグリウンヴェーデル、ルコックのトルファン探検隊です。この敦煌写本やトルファンといった地域から出土した資料については、非常に重なる部分があります。

オーレル・スタインの生家がハンガリーのブダペストにあり、大谷光瑞師からスタインに宛てた手紙も大事に保管されております。スタインの資料につきましては、British Library（大英図書館）が保管しています。もともとBritish Museum、大英博物館の中に文献も美術考古資料も入っていたのですけれども、特にスタイン資料については、大英図書館の方に収められています。

大英図書館に関連して、International Dunhuang Projectがあります。Dunhuangというのは敦煌です。訳すときには「国際敦煌プロジェクト」と言ったりします。この国際敦煌プロジェクトには多くの国が参加しています。ドイツも参加しています。最近ではインドとか、中国もそうです。

一昨年、British Libraryで関係各国の会合がおこなわれました。そのときに来ていたメンバーというのが、ド

イツ、ロシア、中国、そして日本は私たち龍谷大学でした。私もそれに参加いたしました。もちろん本家ですからイギリスが中心となって、関係者がミーティングをおこないました。

龍谷大学がなぜこの中に選ばれているかと言いますと、大谷探検隊が持ち帰った資料、ここにしかない唯一無二の敦煌写本やトルファン資料を持っているということ、そしてただ持っているだけではなくて、長年にわたり研究を進めているということだからです。

ポール・ペリオが敦煌莫高窟の中で作業している写真は、非常に有名なものです。ペリオ収集品を持っているフランス国立図書館、BnFと言いますけれども、私は、二〇一二年に調査に参りました。

ここでは、非常に重要な敦煌写本がたくさんあります。書写年代が分かるもののがかなりたくさんあります。写本の最後にいつこれを書いたか、どんな目的で書いたか、そういうことが書いてあります。そういったものを基準として年代設定をするということがおこなわれました。

「古典籍（文化財）デジタルアーカイブ研究センター」では、年代判定がはっきりできるもの、紙の質の分析というものをおこないました。麻紙なのか、楮紙なのか、桑紙なのか、あるいは種子や繊維などの混在した紙や再生紙なのか、そういったことを非破壊検査や、超高精細デジタル撮影して判定をするということをおこなってききました。

なぜこういうことをやるかと言うと、大谷探検隊が持ち帰った資料は、年代がよく分からないものが多いのです。断片的なものですので、そういったものをいかにして年代を推定するか、そのためには、年代が分かるものを中心に作業し、基礎的な研究をしていく、要するにデータを蓄積していくということのためにおこなっています。

一方、ドイツの探検隊が持ち帰った資料もベルリン市内にある国立図書館のほか、実はあちらこちらに分散して

おります。大谷探検隊だけではありません。ペルリン・ブランデンブルク州立科学アカデミーの中にも書庫がありまして、この中にはさまざまな言語のものがあります。

ドイツトルファン隊が収集したものは二十四種の文字、十七種の言語だと言われていまして、文字と言語という点からしますと、このドイツ隊の方が多いわけです。

なぜこのドイツ隊はこのようなたくさんの文字や言語のものを集めたかと言いますと、探検隊の目的がそこにあつたからです。中央アジアの今は知られていない文字や言語の研究を進めるといふ事業の一環です。現在もこういうことをやられているのです。何年かかってやっているかと思うぐらい長い間かけてやられています。そのような研究の目的というのは、いまだ知られざる文字や言語を解明する。解読をする。そのことが大きな目的としてなされていきました。

漢字のものについては、ドイツには研究者がおりませんでしたので、私たち日本人の仏教研究者に依頼がありました。一九六七年以降長い間、何度も何度も東ドイツを訪問されました。当時東ドイツは国交がありませんでしたから、京都大学とか、国立大学の先生は行けなかつたのです。私立大学の龍大関係者は比較的行きやすかつたのかもしれませんが、私たちの先輩に当たる先生方は、その当時から東ドイツに行かれて、研究を逐次本当に進めてこられました。そのような長年の研究の蓄積というものを受けて、先ほど最初、冒頭に紹介しましたような成果が出てきました。

大谷探検隊の意義

大谷探検隊の目的というところがあります。実際に第一次探検隊が派遣されたのが、一九〇二年の八月十六日で

す。余談になりますが、第一次隊がロンドンを出発したのが八月十六日、第二次探検隊が、これはいろいろ説がありますけれども、北京を出発したとされているのが一九〇八年六月十六日、第三次隊がロンドンを出発したのが一九一〇年の八月十六日です。偶然にも十六日です。

あまりこれを言っている人は少ないですけども、ご承知のように本願寺の明如上人の時にさまざまな改革がおこなわれました。そのときに太陽暦を採用されたのです。明治政府が太陽暦を採用して翌年だと思えますが、一八七三年十一月二十八日が一八七四年一月十六日になり、そしてそれ以来、御正忌報恩講は毎年一月十六日に勤修されています。これはすごく大きな転換点だったと私は思います。私どもが親鸞聖人のご誕生を五月二十一日、ご命日を十六日と申し上げていますけれども、その時期に明如上人がおこなわれたさまざまな改革のうちの一つだと思います。たまたまこの十六日ですが、これは偶然なのか、あるいはそうでないのか分かりませんが、そういう形で一九〇二年の八月十六日にロンドンを出発して行かれました。

大谷光瑞師は、当時ロンドンにおられました、王立地理学協会というところとの関わりがありました。大谷光瑞師は地理学についてもたいへん造詣が深く、本当にさまざまな点に知識があつたわけですけども、アジア人としては初の会員になられて、そして新しい業績、研究というのを、あるいは探検隊の成果というのを如実にその場で見聞きできる、生で知ることができる環境にあつたのだらうと思います。

その中で探検をしないといけないということで始まりました。「明治三十五年八月、予会々英国倫敦に在り」云々というところがそれに当たりますが、大谷光瑞師自ら『西域考古図譜』の序文に書かれている目的を掲げます。

凡そ前後三次の探究に於て、予の目的とせし所は一にして止まらず、而も其の最も著しきものは仏教東漸の経路を明かにし、往昔支那の求法僧が印度に入りし遺跡を討ね、又中央亜細亜が夙に回教徒の手に落ちたる為

めに仏教の蒙りし圧迫の状況を推究するが如き、仏教史上に於ける諸の疑団を解かんとする。

ここに、「仏教東漸の経路」とあります。先ほどブツダロードということを申しましたが、仏教がどのようにしてこの日本に、東へ東へと、道なり道なりに伝わってきたのかという経路を明らかにしたいということです。それから「回教徒」つまり、イスラーム教徒の手に落ちたと書いてあります。現在の新疆ウイグル自治区は、まさにイスラームの地域であります。かつては仏教が非常に盛んに信じられていたことはよく知られていることです。そのような仏教史上のさまざまな問題点、疑問を解決したいということです。

そして、その次が大事ですが、「次に此地に遺存する経論、仏像、仏具等を蒐集し」とあります。この中央アジアやシルクロード沿線にあるさまざまな遺跡にまだ残っているかもしれない經典・文書・仏像・仏具といったものを収集して帰るのだということがはっきりと示されています。

「以て仏教々義の討究及び考古学上の研鑽に資せんとし」、まさにこれが現在の私たちに課せられた課題でありますし、その一部の研究成果が展示されているということです。そして、「若し能ふべくんば地理学、地質学及び気象学上の種々なる疑団をも併せて氷解せしめんと欲したり」とありまして、その目的は、やはり一番重要なのは、仏教の伝播の状況だとか、仏教史上の歴史上の問題であるとか、それから仏教に関連した資料の収集ということになります。

ですから、スウェーデン、イギリス、フランス、ドイツ、ロシアなどの諸国が考えていたような、例えば、地理的空白を埋めようとか、面白いものを見つけて博物館で展示しようとか、あるいは新しい文字や言語を発見して解読しようとか、そのようなことが目的ではなかったということです。どこまでも仏教に関わる部分でおこなわれたということがはっきり分かるかと思えます。ですから、私はよく大谷探検隊については、仏教者の仏教者による仏

教者による探検と考えております。

後に、神戸六甲の「二楽荘」というところで大谷探検隊が持ち帰った資料が展示されます。同地に設けられた武庫仏教中学の校長をつとめた橘瑞超は、十八歳で第二次隊のメンバーとなり、第三次隊にも参加しました。橘瑞超が書いた『二楽叢書』第一号の序文を掲げたいと思います。

摩尼ノ妙珠豈ニ徑寸ヲ以テ優劣ヲ論ゼンヤ 半偈既ニ捨身ノ要アリ 妙典字々尽ク法舍利ニ非ラザルナシ

私は大谷探検隊の資料をよく見ておりますけど、今回展示されていますような大きめの資料を見ることができ一方で、ものすごく小さい資料があります。ツメの先ぐらいしかないような資料もあります。こういうものも山盛りに持って帰っていらっしやいます。

現在、旅順博物館の方が水を付けて、広げて、そして資料にして保管されているものもあります。文字が少しでも書かれてあつたら、それを発掘したり、買って持って帰っていらしたのです。こんなことをされているのは、恐らくほかの探検隊ではないのではないかと思います。とにかく仏教に関係するものを大切にされました。文字が書いてある、これは仏典かもしれない、これは大事なものだ、経典なのだということで、これを大事に持ち帰ったということが、このような言葉から分かります。法舍利、これはどんな小さくても法舍利なのだという思いで持ち帰ったということが理解できます。

私はベルリンにたびたび行きドイツ隊の将来資料を見る機会に恵まれました。確かに小さい資料もあり、漢字資料もあるのですけれども、その表とか裏とかに、様々な文字で書かれています。そこに何が書かれてあるかということよりは、新しい文字や言語を研究したいということが分かるような資料です。

私たちはどちらかというと、仏教の部分、漢字の部分を重視しています。あるいはほかの文字や言語の場合もそ

うなのですが、仏教の文献であるかどうかというのが重要です。その点、大谷探検隊が持ち帰った資料というのは、このような目的の下におこなわれたということがよく分かるかと思えます。非常に小さなものを含めて仏典だ、仏教に関わるものだと書かれています。

ちよつと先に進めたいと思います。白須浄眞先生は、近年、大谷探検について「アジア広域調査活動」と定義されています。そして、「二十世紀初頭、京都・西本願寺の大谷光瑞が内陸アジアを含むアジア広域に派遣した日本の調査隊を指し、仏教流伝の様相をアジア広域の過去と現在に求めようと試みたものであった」とおっしゃっています。全く過不足のない文章だと思います。私も、大谷探検隊は、「探検」という言葉では説明しにくいことだと思います。

特に先ほど申しましたように、内陸アジアだけでなく、アジア全域ということです。西域とか、シルクロードとか、そのような一部の場所ではありませんということです。アジア広域にわたる活動なのです。それから仏教流伝の様相は、単に過去だけではありません。今現在どのような信仰されているか、状況はどうかということを考えてようとおっしゃっているという点では、まさに仏教の過去と現在をその場所に行つて確かめようということであつたということです。

二〇〇三年に、大谷探検隊から一〇〇年を記念した事業の一環として国際シンポジウムが開催されました。二〇〇五年に亡くなりました百済康義先生が、実行委員長として英語で冒頭の挨拶をされることになっていました。当時、咽喉がんで声を失つておられ、電気的な信号でしか言葉を発せられないということで、「三谷君、あなたの声で、私の冒頭のあいさつをおこなつて欲しい」ということで、百済先生の横で、実行委員長の挨拶文を英語で読み上げました。百済先生の代理でメッセージを伝えさせていただきました。

そのときに印象的な言葉がありました。普通、「探検隊」を英語で表現すると「exploration」とか、「expedition」になるわけです。よく私たちも「Orani expedition」「German expedition」という言葉を使うのですが、大谷探検隊の場合、「exploration」とか、「expedition」とは違うのだということを以前からおっしゃっていました。では、どういう言葉が使われたかということ、「Orani mission」。そのときの挨拶文の「大谷探検隊」は「Orani mission」という訳語で表現されました。

なぜなら、仏教に関わる者として、使命感を持ってその現地に向かっていったと、仏教徒としてのありようを確認する、仏教のありようを確認する、まさに仏教徒としての方向性がそこにつながっているということが、その理由であろうと思います。

大谷探検隊と言いますと、一九〇二年から一九一四年、三次にわたっておこなわれたと言われます。今回の展示品の中にも第二次とか、第三次のものもありますけれども、だいたいこの時期だということになるわけです。

ところが私は最近、広義、つまり広い意味での大谷探検隊というのは、一八九九年から一九二三年というふうな期間的な拡張ができると考えておりますし、一方で、先ほどのアジア全域ということも含めています。インドや中国、チベットも含むアジア各地のことを問題としています。ですから、単にシルクロードとか狭い意味の中央アジアとかそんなものではなくて、アジア各地全域の調査です。

特にインドの場合ですと玄奘三蔵が訪れた場所を中心に、きちんとした理解をして、その場所に行っているしやいます。普通、探検というと、何も訳が分からないところに行つて、発掘というイメージがあるのですが、そうではないのです。クチャならクチャ、あるいはトルファンならトルファン、そしてインドならインドという、確かなところを訪れているわけですから、むしろこれは単なる探検といえないわけです。極地探検とか、秘境探検

とか、そういうものとはまったく違うこととあります。あくまで仏教に関わるものであるということです。どうして一八九九年から一九二三年とするかと申しますと、一九〇三年三月二十五日に第二十二世宗主を継職されて初めての「直論」というものが出版されていまして、「去る明治三十二年冬より……欧州の各国を歴訪し、遂に法顕・玄奘の旧跡を慕ひ、許多の艱苦を凌ぎつゝ陸路印度に赴き……」とあります。明治三十二年は一八九九年であることから、探検隊とは言いにくいかもしれませんが、この時期から広い意味での活動が始まっていたということです。

では、一九二三年というのはどうしてかといいますと、第三次探検の最後のところを見ていただきますと、チベットについて、青木文教は一九一三〜一九一六年までラサに滞在し、多田等観は一九一三年にラサに入って一九二三年に帰国しています。この一九二三年をもって、広義の大谷探検隊は終結をしたと見ているということです。大谷光瑞師によってチベットに派遣された青木文教と多田等観。今回の資料の中にも一点ずつ、掲載しております。両方とも出ておりますので、見ていただければと思います。そのうちの一つが「ラサ鳥瞰図」ですね。

第一次探検隊で行かれた方々の名前を出していますが、第二次探検隊、第三次探検隊の中心的な働きをしたのが橘瑞超であります。インドには総合計十一名が行っているということが分かっています。

大谷コレクションの意義

大谷コレクションはその後、いったん二葉荘に収められましたけれども、分散をしていきます。この分散の経緯につきましてはさまざまございます。いったん二葉荘に収められて、その後、分散したという点は明らかにされています。国外と国内でありまして、中国と韓国と、そして日本です。その中でも日本にあるものを並べてみますと、

東京国立博物館、京都国立博物館、そして龍谷大学ということになるかと思えます。

その中で、D-1というのが重要です。龍谷大学所蔵のものの中でも特に大谷家寄贈分とされているもの、これが重要なものになっています。先ほど『西域文化研究』の序文を読み上げました。大谷光照門主が遺品の整理をされたときに約九〇〇〇点のものを寄贈されたということが、この西域文化研究会の研究の契機になったというお話をいたしました。これがその部分に当たっています。

これ以降は、さまざまなものが入ってきました。私自身も龍谷大学に入りましてから、さまざまに寄贈とか、購入の現場に立ち会うことができましたけれども、青木文教将来自の文化資料についてはリストもつくりましたし、第一段階の研究成果も出しましたので、私にとりましても、大変、印象深いものであります。

まず西本願寺から二楽荘に行き、それが旅順の大谷別邸に行き、広東省博物館に行き、現在、旅順博物館にある。いったん久原房之助に売却されたものが、このような形で国立中央博物館になった、というさまざま流れを持って、今現在、あります。今、龍谷大学にあるのは、先ほど言いました大谷家から寄託された形で存在しています。例えば「龍谷の至宝」という展示会の中で写字台文庫、それから大谷コレクションといわれるものは、全てこの本願寺の歴代宗主に関わる部分になります。そういう意味では、龍谷大学自体の宝というよりはむしろ本願寺の歴代宗主の収集されたもの、持ち帰られたもの、こういったものが現在の研究にも大変大きな意味を持っているということが分かります。

ちよつとこれはご覧いただきたいと思えます。今回、展示されているものは、シリーズ展の方にあるものです。これは非常に面白いので、少し紹介したいと思えます。

「蓮華中仏坐像」と書いてあります。これは現在も展示されています。これと同じものが旅順博物館に所蔵され

ています。これは青森県立美術館で旅順博物館展が開催されたときに展示されました。それに合わせ、関連展示として龍谷大学所蔵資料も出せるということになったのですが、十点を厳選するときに、この資料を出そうと思ったのです。もともと同じ型から作られたと考えられます。同じ石膏型に合わせているものですから、同じものなのでそれを出そうと思ったのですが、龍大のものが一番保存状態がいいんですね。ですから、肝心の旅順博物館の影が少し薄くなってしまおうと良くないので、結局出ませんでした。これは現在、展示をされているかと思うので、またご覧になっていただければと思います。このように世界各地に同じような資料があつて、これがお互いに関係しているということです。

「李柏尺牘稿」、重要文化財と上に書いてありますが、残念ながら、現在、本物は展示されていません。今、展示されているものは複製品です。誰が複製したかといいますが、何度か名前を挙げていますけれども、「古典籍（文化財）デジタルアーカイブ研究センター」です。ローラン（楼蘭）出土で、書写年代は三二八年と考証されています。紙に墨で書かれたものとしては最古級のものであるということで、一九六三年に重要文化財に指定されています。

実は、二〇一七年に旅順博物館一〇〇周年記念事業がありまして、入澤学長から旅順博物館の王振芬館長にこの複製品をプレゼントいたしました。これは現在もどこかで展示されているのではないかと思います。

「菩薩頭部」、これはちよつと省略します。「カローシユティー文字木簡」、これは現在は展示されておりませんので、先に進めます。

「クチャ語寺院小麦支出文書」、これは現在、展示されておりません。仏教が長く栄えたクチャの寺院経済を示しています。これは実は先ほど申しました慶先生が最近、これは小麦支出文書であるというをはつきり紹介して

くれまして、私たちに教えてもらいました。記念書籍には写真が出ておりますけれども、実際「小麦」という言葉が数箇所にわたって出ているということが分かっております。これまで長く「トカラ語寺院経済文書」と私たちはいつていたのですが、はつきりと「寺院小麦支出文書」と出しました。今回、初めてタイトルを変えて、このような形にしました。

出土場所はクチャ周辺です。クチャという地域につきましては、今年の二月に国際シンポジウムをおこないまして、大変多くの来場者をいただきました。鳩摩羅什が活躍した場所として知られています。意外にクチャの仏教文化というのは大乘仏教よりも説一切有部の関係があったということが最近、分かっておりまして、そういった新しい情報も提示されております。

「コータン語ザンバスタの書」や、現在、展示されております「ウイグル語天地八陽神呪経」。これは非常にユニークなものでありまして、ウイグル語のものであります。漢語からウイグル語に訳されたものです。他の宗教の影響なども見られるものとして知られています。『天地八陽神呪経』というのは結構、いろいろな国に保存されておりまして、この経典を専門に研究されている先生もいらっしゃるのです。龍大に何度も何度も足を運ばれて、これを見るために来られている。そういう先生もいらっしゃいます。

それから、「西夏語六祖壇経」です。最近、旅順博物館に、一時所在不明になっていた漢字の『六祖壇経』があることが分かりました。王振芬館長のご業績です。西夏語、それから漢字、さまざまな文字のものが最近、総合的に研究することができるようになりました。日本にある西夏語の『六祖壇経』も、そういった意味では大変重要な資料になるということです。これは先ほど言いましたけれども、いろいろな文字や言語の写本資料があるということです。



図5 龍大大宮図書館
所蔵錦

それからもう一つ、ここに三角の切れ目があります。これは長年の謎だったのですね。なぜ三角に切り込みを入れたのが分かりました。旅順博物館に女俑（人形）の頭部が所蔵されていますが、青森県立美術館で展示されたときの図録の表紙になったもので、大変有名なものです。

実は中国の新疆ウイグル自治区博物館に同じような女俑があります。実はここは首をここに載せる、入れ込む、そういうものだったのです。ですから、この三角形の切り込み、あるいは、二枚の錦が逆に継いであるというのも、長年、謎だったのですけれども、氷解したわけです。これは俑の服として再利用されたということです。もともとどういう用途であったかは分かりませんが、この服にしていくときに、それはお墓と一緒に入れるわけですけれども、そのときにこのような形で着せておいた。要するに着せ替え人形のように、首を通すために穴を開けていたということが分かりました。ですから、三角の切れ込みというものはそういうものだったということであります。

一方、青木文教と多田等観がチベットに入っていくという時、グライ・ラマ十三世がおられたわけですが、彼らを持ち帰った資料には違いがあります。青木文教の場合、チベットの「活社会」の生活記録をおこなったわけです。一方で多田等観の場合は、実際にセラ寺というお寺に入って、チベット仏教の修行をしています。外国人としては初のゲシェー（博士）の資格を授与されています。そういった意味で、青木文教はチベットの文化、多田等観は仏教の文献学、そして実際に修行もおこなったという意味で、ずいぶん違った資料を持ち帰っています。今回、

青木文教が持ち帰った資料の中からラサ鳥瞰図、多田等観が持ち帰った資料の中からデルゲ版の大蔵経を展示しております。

龍大の図書館の中なのですけれども、デルゲ版カンギュルが収めてあります。実はこれには登録番号というのがありません。ですから、貸し出しは一切できません。一方で、東京大学にはデルゲ版のテンギュルがありまして、このカンギュル（仏説部）、テンギュル（論書部）を二つ合わせて一セットになります。ですから、東京大学にある資料と龍谷大学にある資料とを二つ合わせるとデルゲ版チベット大蔵経が完成します。そういうものになりますということ、そのうちの一部を今回、展示させていただいているということになります。

それから、「ラサ鳥瞰図」。これは青木文教が現地で作ったものでありまして、甥に当たる青木正信氏が寄託されたものです。青木文教が全てを製作した物ではないので、青木文教編集と言っております。ポタラ宮を中心とするラサ市内が鳥瞰的に表現されているということです。チベットの首都でありますラサ、この経歴などが主に書かれています。

これは東が上になっていますね。当時のラサ市内の様子がこのような形で描かれております。ここにT.B. AWOKIと書いてありまして、青木文教がこの部分を描いたということが分かっています。じっくり見ていただきますと、この文字は、ラサ鳥瞰図の一番下に出ております。

それから、ラサの市内のどこに住んでいたかということも分かっております、龍谷大学仏教学科の能仁正顕先生が実際行かれて確認されたものです。ここに、ヤブシイブカンという場所があつて、ここに実際に居住されて、三年ほど住まわれて、そして、グライ・ラマ十三世の秘書役として活躍をされたということが分かっています。

錦の代わりに、今現在、展示されているもので、記念書籍の方には拳がございませんが、参考資料として、展示

されています。ネパール写本については現在、展示されておりません。

大急ぎになりましたが、これから実際にご覧いただく際に、展示されているものとそうでないものにご留意いただくために、部分的介绍をいたしました。最後になりますが、これまで龍谷大学がおこなってきました西域研究、その成果の一端をこういった形で皆さまにご紹介する大変良い機会をいただいたと思っております。

大谷光瑞師が持ち帰った資料の研究によって、このような学際的研究が始まりました。これはまさに厳選した研究自体の「精華」というものにもなろうかと思っておりますので、資料だけではなく、短い文章ではありませんけれども、記念書籍にあります文章もお読みいただければ幸いです。

ちよつと最後、早口になってしまいました申し訳ございませんでした。これからどうか見学を楽しんでいただければと思います。では、これにて終了させていただきます。どうもありがとうございました。

(*) 龍谷大学創立三八〇周年記念書籍編集委員会編『時空を超えたメッツセージ〜龍谷の至宝』法藏館、二〇一九

図版出典

図1 百濟康義・W・ズンダーマン・吉田豊編『イラン語断片集成』図版編(龍谷大学善本叢書17)、法藏館、1997、p. 48(ソグド文字断片)

図2 旅順博物館・龍谷大学共編『旅順博物館蔵トルファン出土漢文仏典断片選影』法藏館、2006、p. 206(大谷文書との接合表)

図3 旅順博物館・龍谷大学西域文化研究会編『中央アジア出土の仏教写本』2012、口絵

図4 Berlin-Brandenburg Academy of Science and Humanities: Turfan Studies, 2007, p. 9

図5 『朱地連珠鳥形文綿・白地連珠鬮羊文綿』龍谷大学創立三八〇周年記念書籍編集委員会編『時空を超えたメッツセージ〜龍谷の至宝』法藏館、2019、p. 133

はじめに

2019年＝龍谷大学創立380周年・・・学寮1639年(寛永16)

学寮→学林→大教校(1879 竣工)→真宗学庠→大学林(1888)→佛教学(1900)→龍谷大学(1922)

1911 親鸞聖人650回大遠忌・・・大谷光瑞師(鏡如上人) 厳修(梅小路停車場)

1961 親鸞聖人700回大遠忌・・・深草学舎経済学部開設

2011 親鸞聖人750回大遠忌・・・龍谷ミュージアム開設

1) 龍谷の至宝と大谷コレクション

『西域文化研究』「刊行の辞」(第一巻：1958年刊行(1953年：西域文化研究会発足)

敦煌及び中央アジア一帯より豊富な文献や資料が発見され、学界に紹介されてより既に五十年余りを経過した。その間、ヨーロッパ各国及び中国の探検隊に伍して、大谷光瑞上人がインド、チベット、中央アジア、中国等の各地へ派遣された所謂大谷探検隊が我が國にもたらした資料は質、量共にすぐれたものであつた。しかし、爾後の研究が十分行われないまま不幸にも今次の大戦に際会して、その大部分は散逸した。戦後、その残存資料の一部が龍谷大学に移管せられ、ようやくそれらについての組織的な研究が始められたのである。

石濱純太郎博士を研究代表者とする西域文化研究会が、昭和二十八年以来五ヶ年にわたつて継続して来た研究の成果の一部を、ここに刊行しうるに到つた事は、関係者一同の喜びであると共に、中央アジアの古代文化の研究に聊かなりとも貢献しうるものであることを、私は確信している。

本書の刊行に当り、独力大事業を遂行せられた大谷光瑞上人の偉績と、本研究会発足の当初より指導に当られた故羽田亨博士の学勲をたたえ、深く感謝の意を表する。

又、西域文化研究会が発足したのは、大谷探検隊資料を移管せられた大谷光瑞門主並に本派本願寺当局の好意に負うところ絶大であり、五ヶ年にわたる研究の経費は、文部省科学研究費(総合研究)によって補われ、更に本書の刊行も、文部省研究成果刊行費補助金の交付と、出版社法蔵館主西村七兵衛氏の協力によつて可能となつた。これら各方面の御支援に対しても御礼申上げる次第である。

ここに、本書の成る縁由をしるし、謝辞を述べ、併せて各方面の今後一層の御指導と御援助をお願いする。

昭和三十三年三月

西域文化研究会会長
森川智徳

2) 大谷光瑞師(鏡如上人)と探検事業

時代背景・・・近代日本仏教界の危機感

寺檀制度の崩壊、神仏分離・廃仏毀釈・上知令・・・西欧の宗教と伍する合理的宗教としての仏教・浄土真宗の再構築

大谷光尊(明如上人 1850-1903) →集会(1880)・大教校・仏教の近代化、太陽暦の採用など→大谷光瑞師の誕生

大谷探検隊の意義

大谷光瑞師：「西域は是れ仏教興隆し、三宝流通せる故地なり。殊に新疆の地たるや、印度と支那との通路に当り、両地文化の接触せし処にして、又実に仏法東漸の

衝衝たり。然れども此地に於ける教法の衰亡は、既に久しき以前にして、往昔の状況今や得て知るべからず。予夙に此地を始めとして所謂中央亜細亜に対する学術的踏査の忽諸に附すべからざることを知ると雖、其実行の機会に至りては、之を獲ること能はざりしもの久し。明治三十五年八月、予会々英国倫敦に在り、將に故山に帰らんとするに当たりて謂らく、此帰途を利用して予が素志の一端を達せんに如かずと。遂に意を決して自ら西域の聖蹟を歴訪し、別に人を派遣して新疆の内地を訪はしめたり。這次旅行の結果は予をして中央亜細亜探究の愈々必要なるを悟らしめれば、予は更に此目的の爲めに、第二第三の両回に亘りて人を派遣するに至れり。」(香川黙識編『西域考古図譜』「序」冒頭、国華社、1915刊。p.1 大正四(1915)年三月識)

探検の目的

大谷光瑞師：「凡そ前後三次の探究に於て、予の目的とせし所は一にして止まらず、而も其の最も著しきものは仏教東漸の経路を明かにし、往昔支那の求法僧が印度に入りし遺跡を討ね、又中央亜細亜が夙に回教徒の手に落ちたる爲めに仏教の蒙りし圧迫の状況を推究するが如き、仏教史上に於ける諸の疑團を解かんとするに在りき。次に此地に遺存する経論、仏像、仏具等を蒐集し、以て仏教々義の討究及び考古学上の研鑽に資せんとし、若し能ふべくんば地理学、地質学及び気象学上の種々なる疑團をも併せて氷解せしめんと欲したり。」(同 pp.3-4)

橘 瑞超氏：「摩尼ノ妙珠豈ニ径寸ヲ以テ優劣ヲ論ゼンヤ 半佛既ニ捨身ノ要アリ 妙典字々尺法舍利ニ非ラザルナシ」(『二楽叢書』第一号序文、1912刊)

大谷探検隊

白須淨眞：「アジア広域調査活動・大谷探検隊」

「アジア広域調査活動・大谷隊とは、二十世紀初頭、京都・西本願寺の大谷光瑞が内陸アジアを含むアジア広域に派遣した日本の調査隊を指し、仏教流伝の様相をアジア広域の過去と現在に求めようと試みたものであった。」(白須淨眞『大谷光瑞と国際政治社会』p. 263)

広義の大谷探検隊（仏教伝播ルート調査）

第一次探検(1902-04)

中国・新疆・・・渡辺哲信	堀 賢雄	
インド・・・・・・大谷光瑞	本多惠隆	井上弘円
	藤井宣正	日野尊宝 藺田宗忠
	上原芳太郎	升巴陸龍 島地大等
	秋山祐頴	清水黙爾
ビルマ・中国・・渡辺哲乗	吉見円藏	前田徳水
(南方)	野村礼讓	茂野純一

第二次探検(1908-09)

中国・新疆・・・・橘 瑞超	野村栄三郎	
インド・・・・・・大谷光瑞	足利瑞義	和気善巧
	青木文教	柱本瑞俊 (橘・野村合流)

第三次探検(1910-14)

中国・新疆・・・・橘 瑞超	吉川小一郎
チベット・・・・青木文教(1913-1916)	多田等観(1913-1923)

「直諭」1903年3月25日（継職後初めて）

「去る明治三十二年冬より、宇内宗教の現状を視察せんと歐洲の各国を歴訪し、遂に法頭玄奘の旧跡を慕ひ、許多の艱苦を凌ぎつゝ陸路印度に赴き仏祖の靈蹟を探り聊得る所

あり、昔時の隆盛を追想し今日の荒廃を目撃し、感慨の至りに堪えざりき、・・・」(『鏡如上人年譜』p.27) *明治 32(1899)

「大谷探検隊」

- ・時間的広がり・・・1902-1914→1899-1923
- ・空間的広がり・・・中央アジア→インド・中国・チベットを含むアジア各地の仏教の伝播と現状調査

3) 大谷コレクションとその分散

大谷探検隊が収集した資料は、日本の他、中国、韓国に分散して保管されているが、その状況について、早く藤枝晃氏が、以下のようにまとめられている¹。

国外にあるもの

- ・A群・・・中国に保管されているもの
 - A-1群・・・旅順博物館所蔵コレクション
 - A-2群・・・中国国家図書館所蔵コレクション
- ・B群・・・韓国に保管されているもの
 - B群・・・ソウル国立中央博物館所蔵コレクション

国内にあるもの

- ・C群・・・日本の国立博物館に保管されているもの
 - C-1群・・・東京国立博物館所蔵コレクション
 - C-2群・・・京都国立博物館所蔵コレクション
- ・D群・・・龍谷大学に保管されているもの
 - D-1群・・・大谷家寄贈分(木箱二個内のコレクション)
 - D-2群・・・探検隊将来敦煌写経若干巻(西域文化資料 501-537)
 - D-3群・・・橘瑞超氏寄贈敦煌写経六巻
 - D-4群・・・吉川小一郎氏寄贈分(写真原板、流沙殘闕)
 - D-5群・・・堀賢雄、渡辺哲信の日記(『新西域記』未収分)²
- ・E群・・・個人・機関の手にあるもの³

4) 大谷コレクションの学術的意義

龍谷大学所蔵資料の中心をなすのが D-1 群である。その収蔵経緯は以下の通りである。本願寺では、大谷探検隊を派遣した大谷光瑞師が 1948 年に遷化された後、その遺品を整理していた。その際、収集品約 9,000 点の入った木箱 2 箱が発見され、光瑞師の甥で、当時第 23 世宗主・大谷光照師のご好意によって宗門校である龍谷大学に研究委託されることになった。本学学長・森川智徳教授が会長となり、1953 年に「西域文化研究会」が発足し、内外の研究者 20 数名が参加して、まさに全学的研究体制が整備された。文部省の科学研究費を獲得して研究が遂行され、その研究成果は 1958 年より 1963 年に刊行された『西域文化研究』全 6 巻 7 冊として結実した。

その後、文献資料については、龍谷大学佛教文化研究所の「龍谷大学善本叢書」として、井ノ口泰淳責任編集『西域出土佛典の研究：『西域考古圖譜』の漢文佛典』(法蔵館、1980)、

¹ 藤枝晃「大谷コレクションの現状」『仏教東漸—祇園精舎から飛鳥まで』(龍谷大学 350 周年記念学術企画出版編集委員会) 1991, pp.223-230。

² これ以後、野村栄三郎師将来仏頭(1996 年)、青木文教師将来チベット文化資料(2000,2002 年)、堀賢雄師将来資料(2002 年)、藤谷晃道師将来資料(2004 年)などが、寄贈および購入されて収蔵された。

³ その他、臺信祐爾氏によれば、出光美術館、MOA 美術館、シルクロード研究所、天理大学付属図書館、東京大学東洋文化研究所、根津美術館に所蔵されているとされる。臺信祐爾「龍谷大学コレクションを除く日本国内に現存する大谷探検隊将来遺品について」『西本願寺仏教伝播の道跡 100 年展—糸織路の至宝』(佐川美術館,2002) p.21。

同『梵文無量壽經写本集成』(法蔵館、1986)、同『梵文佛典写本聚英』(法蔵館、1990)、上山大峻責任編集『本草集注序録・比丘含注戒本：敦煌写本』(法蔵館、1997)、百濟康義、ヴェルナー・ズンダーマン、吉田豊共著『イラン語断片集成：大谷探検隊収集・龍谷大学所蔵 中央アジア出土イラン資料』(法蔵館 1997)が刊行された。

また、漢文の仏教典籍や俗文書断片の同定や録文を掲載した小田義久編『大谷文書集成 巻』(法蔵館、1984)、同『貳』(1990)・同『參』(2003)、同『肆』(2010)が刊行された。

龍谷大学所蔵の仏教写本については、研究蓄積があるだけでなく、資料のWEB公開も行われている。国際敦煌プロジェクト(International Dunhuang Project, IDP)の日本支局として活動している古典籍デジタルアーカイブ研究センターでは、龍谷大学大宮図書館に所蔵される漢字・非漢字を含む膨大な写本断片をデジタルアーカイブし、2019年9月3日現在で、19,273点の資料がWEB上で公開されている⁴。

写本研究の意義

「写本」とは、一般的には、刊本や版本に対して手書きで写したものの、あるいは原本に対してそれを写したものであるという意味で用いられる。「原本」が存在する場合には、手書きであれ何であれ「写本」にはあまり価値はないが、仏教写本の場合は、いわゆる「原本」なるものが存在しないということに注意が必要である。仏典は、漢文仏典の版本が成立する10世紀以前は、文字レベルでは、数世紀にわたって手書きで写された資料がすべてであった。

釈尊や大乘諸仏の説法たる経典は、最初から文字レベルで記録されたわけではなく、もっぱら口承で伝持された。最古級のパーリ語やサンスクリット語の資料ですら、同時代資料ではなく、ある時代に文字化され書写されて現在に至っている。従って、サンスクリット語で書かれているからといって、それが必ずしも「原本」ではないということである。

西域で出土した資料は、その仏典が成立した時期と、翻訳された時期と、書写された時期との三期を考慮しなければならない。例えば、日本の浄土教各宗で読誦される『仏説阿彌陀經』は、1世紀頃にはインドで成立し、クマールジーヴァ(鳩摩羅什)によって402年に長安で翻訳されたが、それが唐代に書写され、敦煌やトルファンから出土している。一方、『賢愚經』という経典は、5世紀半ばまでに成立したとされているが、その経緯はユニークである。中央アジアのホータン(于闐)の大寺で般遮于瑟会において、胡語で語られたものを河西の釈曇学・威徳など8人が、漢語に翻訳し高昌郡で集めて一部とし、涼州釈慧朗が『賢愚經』と名付けたとされている。この場合、文字化された原典は存在せず、口承から直接に漢訳仏典が成立したことを物語る。旅順博物館に所蔵される同経典の写本の中には、遅くとも6世紀までには書写されたものがあり、成立してからあまり時期を隔てず手書きで写されたものということになり、漢訳された当時の原本に匹敵する価値を持つことが知られるであろう。

紙に書かれた写本資料、俗文書としては、「李柏文書(李柏尺牘稿)」(328年頃 龍谷大学学大宮図書館蔵)が最古とされ、仏典としては、敦煌出土『十誦比丘戒本』(406年 大英図書館蔵)が知られているが、旅順博物館所蔵の『諸仏要集經』写本(大谷探検隊収集)は、紀年のあるものでは、世界最古級の漢文仏教写本となるものである⁵。世界で唯一無二の出土資料が語る情報は多い。そこに先入観や偏見を交えず、真摯に耳を傾けることが重要である。

写本は、文字が書写されている点で、文献資料として扱う場合が多いのは当然であるが、その形態的特徴、つまり、書体・一行文字数・一紙行数・界幅・罫線・界線・書写具・墨質、さらには紙色・紙質などの情報から、その写本の書写年代を推定することができる。

⁴ <http://idp.bl.uk/> 2019年9月3日アクセス。

⁵ 三谷真澄「旅順博物館所蔵『諸仏要集經』写本について」『旅順博物館蔵トルファン出土漢文佛典研究論文集』(西域研究叢書4) 2006, pp.64-73

紙や墨、あるいは写本に付着した土に対する科学的アプローチによっては、将来、どこで紙が作製されたのか、どこで書写されたのか、どこで発見されたのか、などを推定することが可能となるであろう。

2001年に開設された「古典籍デジタルアーカイブ研究センター」では、紙質の科学的分析をはじめとする研究成果を、「李柏尺牘稿」の復元に結実させている。2019年度からは「古典籍・文化財デジタルアーカイブ研究センター(DARC)」として再出発しており、この点を継承し、デジタルミュージアムを含む様々な展観方法を摸索していきたい。

5) 龍谷の至宝展展示品紹介

「大谷探検隊の精華」

第5章・・・14+1点

- 1 李柏尺牘稿 51
- 2 菩薩頭部 52
- 3 カローシュティエ文字木簡 53
- 4 クチャ語 寺院小麦支出文書 54
- 5 コータン語 ザンバスタの書 55
- 6 ウイグル語 天地八陽神呪経 56
- 7 西夏語 六祖壇経 57
- 8 青龍（給田文書） 58
- 9 伏羲・女媧図 59
- 10 朱地連珠天馬文錦 60
- 11 朱地連珠鳥形文綿・白地連珠鬪羊文綿 61
- 12 紺地文字・三日月文錦 62
(特別出陳 蘇芳地魚子纈纈と刺繡断片)
- 13 チベット語 無量寿経（デルゲ版） 63
- 14 ラサ島瞰図 64
(敦煌本 本草集注 (書籍のみ pp.148-149))

その他(第5章以外)・・・2点

- 1 ネパール梵本 無量寿経 神本 6
- 2 ネパール梵本 大乘莊嚴経論 光寿会本 7

シリーズ展5 (2階展示室)・・・6点

- 1 アショーカ王碑文拓本 石柱法勅第4章 6
- 2 アショーカ王碑文拓本 石柱法勅第6章 7
- 3 クッダカ・ニカーヤ (タイ王室版) 8
- 4 延寿命経 13
- 5 仏頭部 (複製) 20
- 6 蓮華中仏坐像 21

書籍「デジタルアーカイブコラム」ページ

- 1 ホッチョ Chotscho ×(書籍 p.50)
- 2 大谷探検隊撮影ガラス乾板 ×(書籍 p.122)
- 3 天山植物標本 ×(書籍 p.154)

その他パネル展示

- 1 大宮学舎本館 (書籍 pp.94-95)
- 2 樹心館(旧図書館)(書籍 pp. 96-97)

おわりに

龍谷大学所蔵の大谷探検隊収集資料には、文献資料と美術考古資料とがある。そのうち、敦煌・トルファンから出土した写本を中心とする文献資料の研究において、重要な学術的情報を提供してきた。

トルファン写本は、首尾や奥書の完備したものも相当数ある敦煌写本と異なり、非常に断片的である。首尾や上下の完備した写本は希で、紀年のあるものはほとんどない。一方で、筆写された文字と言語が多様であることも特徴に数えられる。ドイツトルファン隊が収集した文献資料は、「24種の文字・17種の言語」とまとめられ、大谷探検隊が収集した資料の一部である龍谷大学所蔵資料の中にも、「13種の文字・15種の言語⁶」がある。例えばブラーフミー文字で書かれていても、その言語はサンスクリット語とは限らず、古代トルコ語、ソグド語、チベット語、トカラ語(A/B)など11種の言語が知られているのである。内容についても、仏教だけでなく、マニ教や景教(東シリア教会、ネストリウス派キリスト教)など多様な宗教文献が含まれている。このように多岐に亘る文字と言語の交錯は、多文化が複雑に入り組んだ西域という環境の中では必然の結果であったのかも知れない。

従来、写本資料の多くが漢文仏教写本であったことから、その資料に書写された文字を録文し、主として大正新脩大蔵経(大正蔵)を中心とする現存する各種の版本大蔵経所収テキストとの同定を行い、その異同を示し、かつ仏教史・教理史等の立場から解説を加えてきた。もちろん、その解説研究が基礎研究として重要なことは言うまでもない。しかし、現代では大蔵経テキストデータベース研究会(SAT)、台湾・中華電子仏典協会(CBETA)のデジタルデータや検索ソフトの普及によって、かつては考えられない速度と精度で同定作業を進めることが可能となっている。

大谷光瑞師(鏡如上人)没後(遷化)70年にあたる2018年には、前期に『西域文化研究』創刊60周年記念として、龍谷講座「知の宝庫としてのシルクロード」を開講し、RECコミュニティカレッジ「大谷光瑞師のめざしたもの」を実施した。そして、後期の10月5日には、遷化70年法要を大教校の講義棟であった大宮学舎本館講堂にて勤修し、翌日にはかつて普通教校のあった東麓にて国際シンポジウム「大谷光瑞師の構想と居住空間」を開催し、同名の特別展を本館展覧室で開催した。

まさに、龍谷大学の西域文化研究の歴史は、大谷光瑞師の派遣した探検隊の持ち帰った資料の研究によってはじまり、1953年にはじまる西域文化研究会の研究は、学際的、国際的、文理連携・融合型研究の嚆矢と位置づけられるのである。今回の展示品は、これまでの研究成果をふまえ、厳選した研究の「精華」でもある。

⁶ 故百濟康義氏の調査では、文字は、ブラーフミー文字(梵字)、チベット文字、カローシュティー文字、ルーン文字、マニ文字、ソグド文字、シリア文字、ウイグル文字、モンゴル文字、アラビア文字、漢字、西夏文字、パズバ文字の13種が確認されている。また、言語は、サンスクリット語(古典・梵語)、ブラークリット語(中期インド俗方言)、中世ペルシア語、コータン語、バルティア語、ソグド語、クチャ語(トカラ語B)、シリア語、古典中国語(漢語)、チベット語、突厥語(テュルク語)、ウイグル語、西夏語、モンゴル語(蒙古語)、アラビア語の15種の言語にわたる。